



Data 2023-7

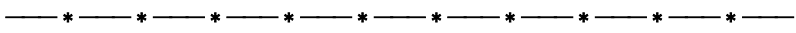
監督: マリア・シュラーダー
 原作: ジョディ・カンター/ミーガン・トウーイー『その名を暴けー#MeTooに火をつけたジャーナリストたちの闘い』
 出演: キャリー・マリガン/ゾーイ・カザン/パトリシア・クラークソン/アンドレ・ブラウアー/ジェニファー・イリー/サマンサ・モートン/アシュレイ・ジャッド

👁️👁️ みどころ

コロナ禍を巡っては、一党独裁専制国家VS民主主義国家のどちらがベター? そんな議論も起きた。しかし、権力に抵抗する新聞記者を描く映画を見ると、自由の国、民主主義の国アメリカの素晴らしさがくっきりと!

権力者の横暴は政治だけでなく、映画界でも同じ。しかし、監督やプロデューサーのよこしまな権力が陰湿かつ執拗に女優やスタッフに及ぶと・・・?

米国における#Me Too運動の実態は、メディア界では『スキャンダル』(19年)を、映画界では本作を見れば明々白々に。問題は、いかにしてそれが公になったかということだが、それは本作でじっくりと。改めて、憲法上の権利である報道の自由、取材の自由の価値をしっかりとみしめたい。



■□■アメリカは“記者モノ”の宝庫!そこに新たな名作が!■□■

民主主義の本場アメリカの進歩の原動力は“自由”だが、そこには憲法上の権利として、報道の自由や取材の自由が含まれている。そこが、共産党一党独裁の国、中国とは根本的に違うところだ。そのため、ハリウッド映画には“記者モノ”の名作が多い。

その代表は、古くは、①『大統領の陰謀』(76年)だが、近時は、②『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』(17年)、『シネマ41』37頁)や、③『記者たち 衝撃と畏怖の真実』(17年)、『シネマ45』12頁)等がある。

ちなみに、同じ民主主義国でありながら、アメリカのような大統領制でも、二大政党制でもなく、なぜか自民党の一党支配が長く続いてきた日本では、新聞記者の奮闘精神がアメリカに劣るとは思わないものの、前述のようなダイナミックな“記者モノ”の秀作は少なかった。望月衣塑子の小説を映画化した、近時の『新聞記者』(19年)、『シネマ45』24頁)は数少ない例外だった。

■□■#Me Too 運動の出発点は？メディア界は？映画界は？■□■

アメリカにおける近時の#Me Too 運動の高揚ぶりは凄まじいが、アメリカで視聴率トップを誇っていた「FOX ニュース」内で起きた、「グレッチェン VS ロジャー事件」にはビックリ！そのスキャンダルを、シャーリーズ・セロン、ニコール・キッドマン、マーゴット・ロビーという3大女優の共演で描いた映画が『スキャンダル』（19年）（『シネマ46』50頁）だった。そして、このグレッチェン VS ロジャー事件が、メディア界における#Me Too 運動の出発点になった。同作は長年 FOX ニュースの花形キャスターとして活躍してきた、ニコール・キッドマン扮するグレッチェンが、77歳にして本業も政治も、そしてお色気も超元気な FOX ニュースのロジャー会長（CEO）をセクハラ疑惑で告発するところから本格的ストーリーが始まった。このように、メディア界で FOX ニュースの最高権力者にセクハラ疑惑があるのなら、映画界にも同じようにセクハラ疑惑が・・・？

他方、映画界における#Me Too 運動の出発点になったのが、本作が描く「ハーヴェイ・ワインスタイン事件」だ。映画製作においては、監督の権力は絶対的なもの。日本の巨匠、黒澤明監督は「黒澤天皇」と呼ばれていたくらいだから、俳優の起用等は当然すべて監督の権限だ。もっとも、その監督も映画制作の資金を提供してくれる有能なプロデューサーがいなければ力を発揮できないから、本当の映画界の実力者は監督ではなく、プロデューサー？ハーヴェイ・ワインスタインは、①『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（97年）、②『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）、③『ロード・オブ・ザ・リング』（01年）（『シネマ1』29頁）、④『英国王のスピーチ』（10年）（『シネマ26』10頁）など、数々の名作を手掛けた超有名なプロデューサーだが、そんな彼にセクハラ疑惑が？

本作は、そんな情報を得たアメリカ大手新聞社のひとつ、NY タイムズ紙の調査報道記者であるミーガン・トゥーイー（キャリー・マリガン）とジョディ・カンター（ゾーイ・カザン）が調査に乗り出すところからスタート！

■□■女性監督の視線は終始2人の女性記者と共に！■□■

本作は、『SHE SAID／シー・セッド その名を暴け』とタイトルされているが、『新聞記者たち』というタイトルでも OK。それはなぜなら、マリア・シュラーダー監督は本作で、終始、NY タイムズ紙の2人の女性記者、ミーガンとジョディの調査取材に焦点を当てているからだ。

女優でもあり、脚本家でもある女性監督マリア・シュラーダーは、パンフにある監督インタビューの中で、本作が『大統領の陰謀』（76年）と共通点が多いことを認めたくて、「私の映画の場合2人の立場は同じだけれど、私生活も同時に描く点で真実像により迫っています。」と語り、さらに「重大な事件を追っている時、自宅ではまったく考えないということはありません。追っている事件が他人事ではなくなります。2人は働きながら子育てし、共働きでパートナーもいて、それが働く女性の現実。その点を挿入できたことを、とても誇りに思っているのです。特にこのジャンルの映画でやれたことを嬉しく思ってい

ます。」と語っている。なるほど、なるほど。

本作でミーガン役を演じたキャリー・マリガンは、『プライドと偏見』(05年)、『シネマ10』(198頁)、『17歳の肖像』(08年)、『シネマ24』(20頁)、『わたしを離さないで』(10年)、『シネマ26』(98頁)、『プロミシング・ヤング・ウーマン』(20年)、『シネマ49』(20頁)等で今や超一流の女優。他方、ジョディ役のゾーイ・カザンも、『レボリューションナリー・ロード 燃え尽きるまで』(08年)、『シネマ22』(58頁)、『ニューヨーク 親切的ロシア料理店』(19年)、『シネマ48』(302頁)等で有名な女優だ。

私には、一方で子育てをしながら、他方でこれほどの新聞記者魂を發揮し続ける2人の女性のエネルギーがなかなか理解できないが、とにかくスクリーン上に見るこの2人の新聞記者の奮闘は素晴らしい。しかも、それははじめから終りまで続くから、本作ではその姿をしっかりと確認したい。

■取材の対象は？彼女たちの口の重さは？いつ証言を？■

弁護士の私はセクハラ事件を、被害者側としても加害者側としても担当したことはないが、それを担当した場合の難しさはよくわかる。しかし、新聞記者としてセクハラ被害者の掘り起こしをしていく作業は、多分もっと難しいだろう。また、ある人物から、ある情報を得ても、それをどう使えばいいのかも難しい。そこで失敗したり、誰かの心変わりや裏切りに遭えば、自分の記者生命すら危うくなる可能性さえあるだろう。さらに、いくら頑張っても情報を得ても、直接の上司や上層部の意向によって、もみ消しにされてしまえば、それまでの努力は水の泡だ。

そんなリスクを覚悟の上で、ミーガンとジョディは、①ミラマックス社のロンドン支社で働いていた21歳の時に被害に遭ったローラ・マッデン(ジェニファー・イーリー)、②ミラマックス社でアシスタントとして働いていた頃、同僚のロウィーナ・チウ(アンジェラ・ヨー)からワインスタインに性的暴行を受けたと打ち明けられたゼルダ・パーキンス(サマンサ・モートン)、③ミラマックス社の元アシスタントで、1998年のヴェネチア国際映画祭でワインスタインから性的暴行を受けたロウィーナ・チウ、への取材を進めていくので、それに注目！

そこで私が興味深かったのは、本作には『ダブル・ジョパディー』(99年)で、私が注目した美人女優アシュレイ・ジャッドも被害者の1人として登場していること。彼女の身に一体何があったの？さらに、本作のパンフレットには「OTHER CHARACTERS」「ワインスタインの被害に遭ったサパイバーたち」として、①ローズ・マッゴーン、②グウィネス・パルトロー、③ミラマックスの元アシスタント(匿名)、④アンブラ・バットィラーナ・グティエレスが登場するので、それにも注目！ミーガンとジョディによる、これらの被害者たちへの取材姿をじっくり鑑賞したいが、一様に彼女たちの口が重いのは当然。いくら取材しても、それに応じてくれなければ、新聞記者の努力はすべて無駄になってしまうが、さてミーガンとジョディは、いつどんな形で、口の重い彼女(被害者)たちから

真実を語ってもらえるのだろうか？

■□■加害者側の取材は？代理人弁護士は？副社長らは？■□■

ジョディがはじめてワインスタインからのセクハラ被害者の声を聞いたのは、2017年5月に女優のローズ・マッゴワンから“非公開”を前提とする電話を受けた時。そこからミーガンとジョディの2人による取材活動が開始したわけだが、それから3ヶ月後の8月には、ワインスタインの代理人弁護士であるラニー・デイヴィスが、NYタイムズ本社を訪れてきたから、ビックリ。この席にはミーガンとジョディの上司であるレベッカ・コーベット（パトリシア・クラークソン）とディーン・バケット（アンドレ・ブラウアー）も同席したが、そこでラニー・デイヴィス弁護士は、ワインスタインが女性との間に起きたトラブルを示談で解決していることを認めたから、ビックリ。しかし、なぜ彼はわざわざNYタイムズ本社を訪れてそんな話をしたの？それはきっと、NYタイムズ社による真実の解明がトコトン進む前の曖昧な段階で、何らかの形での示談を狙ったためだが、さて、NYタイムズ側はどうするの？こんな場合、NYタイムズ側にも弁護士が同席するのが当然だと私は思うのだが、本作にはNYタイムズ側の代理人弁護士は登場してこないから、それにも注目！

他方、ミーガンとジョディによるワインスタイン側との接触は、前述の①代理人弁護士、ラニー・デイヴィスに続いて、②グティエレスの事件を担当した、性犯罪事件専門の元検事、リンダ・フェアスタイン、③ワインスタインの代理人弁護士で、フェミニスト弁護士で有名なグロリア・オールレッドを母親に持つ、リサ・ブルームと続き、さらには④ワインスタイン・カンパニーの財務会計を担当する副社長のアーウィン・ライター、⑤ワインスタイン・カンパニーの理事のひとりであるランス・マエロフにも及んだからすごい。さらに、私がそこでビックリしたのは、女性たちの被害を知ったアーウィン・ライターが、ワインスタイン・カンパニーの元下級管理職のオコナーのメモをジョディに見せたり、ランス・マエロフもオコナーのメモを記事に引用することを承諾したことだが、それは一体なぜ？本作はミーガンとジョディの取材をドキュメンタリー・タッチで追うことに熱心で、そこらあたりの分析や解説は一切してくれないから、それについては1人1人の観客がじっくり考えたい。

■□■記事の内容は？公開はいつ、どんなタイミングで？■□■

本作は、全編にわたってミーガンとジョディの取材活動に重点を置いており、徹底的に新聞記者魂の在り方に焦点を当てている。そのため、同僚や上司との確執等は一切描かれない上、編集局次長のレベッカ・コーベットも、編集長のディーン・バケットも理想的な上司としてミーガンとジョディを支えてくれている。

それが実話かどうかは知らないが、本作後半のクライマックスに向けては、①アシュレイ・ジャッドからの、「あなたの記事に名前を出すことOK」との協力、②ワインスタイン・カンパニーの社長デイヴィット・グラッサーからの、「示談金を払ったのが8～12件であ

ることを匿名で証言する」との協力、③乳がん手術を控えたローラからの、「実名で公表する」との協力、④弁護士のリサ・ブルームからの、「ワインスタインが休暇を取るつもりであることを電話で確認した」との協力が続くのでそれに注目！それによって、ワインスタインのセクハラ行為は確実だ、と判断したミーガンとジョディ、そして上司のレベッカとディーンは、いかなる内容のワインスタイン告発記事にするの？2人が書いた記事の原稿を読んだレベッカとディーンはそれにOKしたが、さあ、記事の公開はいつ？どんなタイミングで？それは、2017年10月5日になったが、さて、その反響は？

■□■日本の映画界のセクハラ騒動は？記事の反響は？■□■

ハリウッドは日本映画の偉大な先輩だから、そのあらゆるものが日本に輸入されている。そのため、映画製作における監督を中心とした絶対的権力構造も日本にそのまま輸入されたい。映画界では監督の権力は絶対！そのため、日本映画界の巨匠中の巨匠、黒澤明監督はかつて“黒澤天皇”と呼ばれていた。そんな映画界における権力構造は、悪い面ばかりではなく、良い面もあるが、絶対的にダメなことは、そんな監督＝絶対的権力者の地位を利用して、女性やスタッフに陰湿かつ執拗にセクハラ行為を強要することだ。

しかして、日本では2022年3月に公開が予定されていた、性被害を描いた映画『密月』の楠英雄監督について、「過去に性的関係を強要された」と俳優たちが告発したため、同作は直前に公開が中止されてしまったから、さあ、大変。さらに、『愛のむきだし』（08年）（『シネマ22』276頁）、『冷たい熱帯魚』（10年）（『シネマ26』172頁）など、数々の話題作を世に送り出している園子温監督についても、2022年4月、性加害疑惑を『週刊女性』が報じたからビックリ。そんな状況下、是枝裕和監督らは、監督の立場を利用したあらゆる暴力に反対するとの声明を発表した。日本の映画界を巡る、そんな権力者による俳優等へのセクハラ騒動も大変だが、告発したNYタイムズの記事によって、自らのセクハラ行為を告発されたワインスタインの処分は？

本作のパンフレットのプロダクションノートには、「影響と余波 ひとつの記事がどのように世界を揺るがしたのか」があり、ワインスタインの処分についてはそこで詳しく解説されているので、これは必読！それによると、ワインスタインは、2020年2月24日、第1級犯罪的性行為と第3級強姦罪で有罪となり、2020年3月11日、当時67歳の彼は23年の禁固刑を言い渡されたそうだ。私は66歳の時の2015年1月に大腸がんの、67歳の時の2016年9月に胃がんの手術をするという試練を受けたが、上記のワインスタインの試練はそれに比べてもあまりにも大きいものだ。ニューヨークの有罪判決に対するワインスタインの控訴が認められ、その口頭弁論は2023年に行われる可能性があるそうだが、彼の映画人としての人生は完全にアウトだろう。ペンの力は強い。本作はそのことをまざまざと教えてくれるが、それ以上に大切なことは、記事を書くための取材、つまり新聞記者魂のあり方をしっかり頭に刻みつけたい。

2023（令和5）年2月6日記